愛知の博物館　No.101

リニューアル前の１階展示室

リニューアル後

一宮市博物館

昭和 62 年（1987）11 月に開館した一宮市博物館も、今年 27 年目を迎えました。この間に旧一宮市・尾西市・木曽川町が合併し、市域が拡大したこともあり、約 7 か月間の休館を経て、常設展示を一新し、平成 26 年 10 月 18 日にリニューアルオープンしました。

リニューアルに際しては、現在小学生の来館が多いこともあり、あえて展示内容を絞り、解説文も平易な表現を心がけ、子どもの目線でも理解しやすい展示を目指しました。

目　次

● 第 39 回東海三県博物館研究交流会の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
● 平成 26 年度愛知県博物館等職員研修会の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・3
● 平成 26 年度部門別研修会の報告
　教育・普及部門研修会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　保存・修復部門研修会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第 39 回
東海三県博物館研究交流会の報告

平成 26 年 10 月 17 日の東海三県博物館研究交流会の状況を報告します。

本年度の交流会は、同日午後に開催した愛知県博物館等職員研修会と共通のテーマを設け、「地域と結びついた博物館活動～地域に必要とされる館になるために」と題して開催され、三県合計 60 名（内　愛知県 42 名）が参加した。

〈内容〉

・あいさつ　10:30~10:35
　愛知県博物館協会
　会長／愛知県陶磁美術館　館長　下畑昌史氏

・事例発表　10:35~12:05
「地域の支えられた博物館活動」
　新城市設楽原歴史資料館　学芸員　湯浅大司氏

「みえむ(三重県総合博物館)の展示製作と地域と結びついた活動～松阪市朝見地区の事例から～」
　三重県総合博物館　主査（学芸員）北村淳一氏

「地域と結びついた博物館活動」
　古今伝授の里フィールドミュージアム所長
　　金子徳彦氏

・質疑応答　12:05~12:15

〈概要〉

今日、社会における博物館施設のあり方は大きく変わっており、資料の収集・保存、調査・研究、教育・普及といった博物館活動の柱を、社会との関わりの中で各館独自のものとして捉えなおし、実践していけるのかが求められている。そこで今回は、各県から特徴的な取り組みについて、いくつかの事例をもとに地域と結びつき、地域に必要とされる博物館活動についてその実践例を報告していただいた。

愛知県の湯浅氏からは、設楽原の歴史や情景を学ぶ設楽原をまもる会、火縄銃を通じて長篠・設楽原の戦いを学ぶ長篠・設楽原鉄砲隊、幕末外交官岩瀬忠震を顕彰する忠震会など資料館と地域住民とのかかわりについて発表がなされた。地域住民の協力のもとに館だけではできなかった活動が実現できることの利点とともに地域住民が参加することによる問題点が述べられた。

湯浅　大司　氏
（新城市設楽原歴史資料館　学芸員）

三重県の北村氏からは、開館したばかりの三重県総合博物館が「ともに考え、活動し、成長する博物館」という理念をどのように実現しようとしているのかを、奈良時代の条里制による土地区画整備された圃場が残る朝見地区の例をもとに発表された。地域の特性に目を向けた博物館活動によって、地域の環境と人のくらしの豊かさの両立を図ることができることの可能性が示された。

北村 淳一 氏
（三重県総合博物館　主査〈学芸員〉）

岐阜の金子氏からは、「古今伝授の里フィールドミュージアム」が、東氏と古今伝授及び和歌文学の展示施設と周辺に点在する遺跡や自然環境など複合的な要素を取り込んだ博物館として命名されたこと、また、博物館が町づくりのシンボル事業として位置づけられているために、地域の人々が実行委員となって様々な野外イベント（薪能くるす桜、法楽連歌の復興など）を開催している例が紹介された。

金子 徳彦 氏
（古今伝授の里フィールドミュージアム　所長）

今年度の東海三県博物館研究交流会は、午後の愛知県博物館協会職員研修会とあわせて、地域と結びついた様々な活動の事例を聞くことができ、自身の館の活動を再考する良い機会となった。

（大長智広　愛知県陶磁美術館
学芸員／愛知県博物館協会　事務局）

平成 26 年度愛知県博物館等職員研修会
「地域と結びついた博物館活動ー地域に必要とされる館になるために」

平成 26 年 10 月 17 日(金) 14：00～

平成23年３月11日に起きた東日本大震災は、博物館施設やその収蔵品に重大な被害をもたらした。震災の復旧について、人命救助、インフラ復興だけでなく、早い段階での文化財や博物館施設の復興を考えると、いかに博物館が社会生活のなかで住民にとって必要とされる存在になっているかが問題となるだろう。

地域にとって必要とされるためには、博物館が地域や住民と連携して事業を行う必要があり、博物館や文化財を通して地域や住民と結びつく活動が求められる。こうした活動の多様化や災害時の対応の整備といった問題は各館共通の課題であり、今回の研修会でも学ぶべき点が多く見受けられた。以下、その内容について紹介していく。

講演「地域連携による東日本大震災博物館資料の救援活動と今後の課題–岩手県立博物館の取り組みを中心に–」
岩手県立博物館
首席専門学芸員（文化財科学部門）
赤沼英男氏

赤沼 英男 氏

（岩手県立博物館 首席専門学芸員〈文化財科学部門〉）

東日本大震災では、巨大地震と大津波によって、多くの博物館施設が損壊した。また、文化財も海水による損壊や流出などの被害を受けている。

災害が発生すると、人命救助やライフラインの復旧が優先される。しかし陸前高田市立図書館の全壊で被災した吉田家文書は、これを解読していた古文書の会により救出が要請された。要請は図書館から教育委員会に伝達され、３月 30 日という早い段階で救援活動が開始された。市立図書館救援活動後引き続き、市立博物館の救援活動が行われ、その過程で自衛隊の支援が得られた。施設が大破した上、内部に多量の生活物資やガレキが流入し、非常に危険な状態にあったことがその大きな理由である。自衛隊派遣の支援は人命救助も含め、緊急性・公共性・非代替性を含む３要件が整えば、様々な活動の支援をするという。地域からの被災文化財救援要請は重要な意味を持つ。平時、地域における活動が地域住民に定着し、広く受け入れられてきたことが、岩手県内の中でもきわめて深刻な被災を受けた陸前高田市において実現したものと思われる。

被災文化財の救援は、被災施設からの救出と、救出した被災資料の安定化処理という２段階に分けることができる。前者は地域連携、後者は全国の様々な自治体や専門機関による広域連携が望ましく、被災地における中核博物館は、地域の博物館や団体等が所有する文化財に関する情報の共有化、他機関への情報の発信、非常事態に対応できる体制づくり、専門家、研究者との連携構築を図る必要がある。

さらに、災害時、博物館施設が地域住民の避難所となることを想定し、非常時の食糧、毛布などの常備品確保やマニュアルの整備をしておかなければならない。災害時、文化財の救出・保全を円滑に進めるためには、資料整理や成果を公表し、地域住民に博物館活動を理解していただき、地域の生活に必要な博物館となることを意識しなければならない。

事例発表①

「見晴台遺跡–市民と共に進める発掘調査」

名古屋市博物館　学芸課係長　村木 誠 氏

村木 誠 氏（名古屋市博物館　学芸課係長）

見晴台考古資料館は、弥生時代の環濠集落を中心とした遺跡上に立地し、遺跡博物館として、発掘調査・展示・広報普及活動を行っている。

資料館では、昭和 60 年（1985）以降、市民

参加の「市民発掘」を実施している。名古屋市内在住の中学生以上が参加条件で、参加者は事前説明会を受講し、単なる体験ではなく、発掘調査のすべての作業に関わる。運営は資料館学芸員が担うが、発掘経験者のサポートも取り入れて行う。

「市民発掘」は市民と学芸員の双方向的なコミュニケーションの上に成り立ち、発掘体験よりも考古学を体験する。発掘調査を通して市民とともに行った資料収集・調査研究の成果は、展示という形で市民に還元され、見晴台遺跡や考古学についての教育普及で用いられる。

考古学に興味のある人だけでなく、より幅広い市民といかなる関係を築いていくかという「パブリックアーケオロジー」の視点が今後重要になる。

事例発表②

「ミュージアムと地域との関わりについて」

ＩＮＡＸライブミュージアム

館長　住吉 和夫 氏

住吉 和夫 氏（INAX ライブミュージアム　館長）

ＩＮＡＸライブミュージアムでは、「やきものの街、常滑」を意識した地域連携活動を行っている。学校連携では、小中学校の総合学習で常滑の土を用いた家を守る神様（テラコッタ）の製作や、常滑高校セラミックアーツ科の卒業展覧会を行い、出張授業を開催している。

また、親子・市民参加型のワークショップも開催し、やきものの日時計やピンホールづくりに取り組んでいる。さらに常滑市立図書館と連携し、タイルの絵の展示も行っている。常滑市に建設される新病院に設置するモザイクタイルの壁画については、デザインを一般公募し、タイル製作を中学高校の美術の授業に取り込むなど、博物館の枠にとらわれず、やきもの産業の教育普及活動を行っている。

こうした地域と連携する授業、ワークショップ、イベントなどは、子どもたちにとって身近なものとなるよう意識し、スタッフのモチベーションが高くなるよう重視することを心がけている。

今回の職員研修会では、地域に結びつくための３つの事例が紹介された。共通するのは、博物館や文化財を資源として住民が意識し、利用できるものとして認識してもらうことだろう。調査研究、展示、教育普及活動を一方向にとどまらず、地域と双方向で考えていく必要性を改めて認識した研修会であった。

（武藤　真　名古屋市博物館　学芸員）

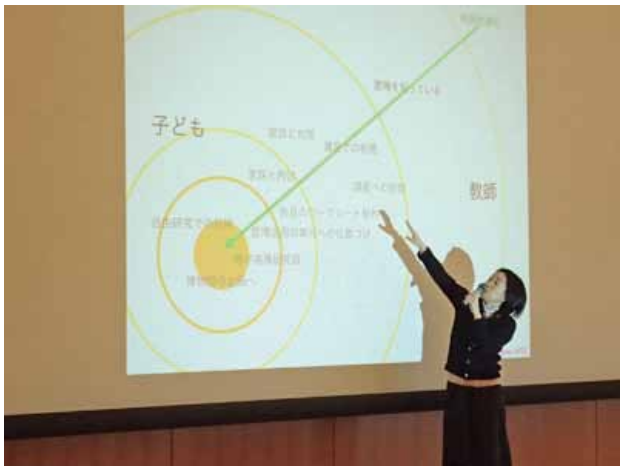
平成 26 年度愛知県博物館協会
教育・普及部門研修会
「博物館における学びのデザイン」

平成２６年度教育・普及部門研修会は、平成２７年２月１０日（火）に、愛知芸術文化センター １２階　アートスペースＡを会場として開催された。参加者は４４名であった。今年度の研修テーマは「博物館における学びのデザイン」

とし、佐藤優香氏（東京大学大学院情報学環特任教授・元国立歴史民俗博物館助教）を講師に、学習ツールの開発に関わる講演および実際のワークショップ体験の後、それらを受けた実践として、自館のツールの再検討を行った。

講演

初めに、佐藤氏による「博物館におけるコミュニケーションとツール」と題した 60 分の講演を行った。



佐藤優香氏（東京大学大学院情報学環 特任教授・元国立歴史民俗博物館 助教）による講演

まず、博物館体験に関するアンケートの分析から、体験や心の動きを伴ったものが記憶に残りやすく、また思い出はものや人と結びついて残るものであるとのことだった。さらに、来館者は博物館のワークシートに、展示物をじっくり見たり、楽しんだりするのに役立つことを求めており、ワークシートの製作においては「楽しさ」ということをより重要視すべきであると述べられた。子ども向けのワークシートは、保護者が子どものために解説文を読んだり、一緒に考えたりという形でともに楽しむことのできるツールにもなっており、博物館体験として記憶に残るものも、期待されているものも、このようなコミュニケーションであると結論付けられた。

次に、佐藤氏が国立歴史民俗博物館で製作に関わった学習ツールを例に、学習ツールのデザインを決定していく具体的な方法の解説がなされた。国立歴史民俗博物館の受付で子どもの来館者に配布されるポップアップ式のマップについては、それまでの冊子形式のパンフレットの問題点を洗い出し、それらの問題を解決するためのツールとして開発されたとのことだった。

また、江戸期の長崎の情景を展開させた屏風や江戸時代の輸出入品の展示では、観覧した小学生の輸出・輸入の捉え方に混乱が見られたことから、ワークシートはその混乱を整理できるようなデザインにしたそうである。

展示の理解を深めるためには、子どもたちの今までの体験と結びつけることが効果的で、小袖の展示では、現在でも着物を着ることの多い七五三を取り上げた例の紹介があった。また、中高年の女性をターゲットにしたワークショップでは、自分の意見を用紙に書いてもらう方法ではあまり活発な活動にならなかったが、自由に会話してもらい、学生がそれをメモする形式にしたところ、充実した活動となった例も紹介され、コンセプトやターゲットに合わせたプログラムデザインの重要性を述べられた。

さらに、費用の確保の方法などの話もあり、実際に学習ツールの開発に携わる博物館職員にとって、大変示唆に富む講演だった。

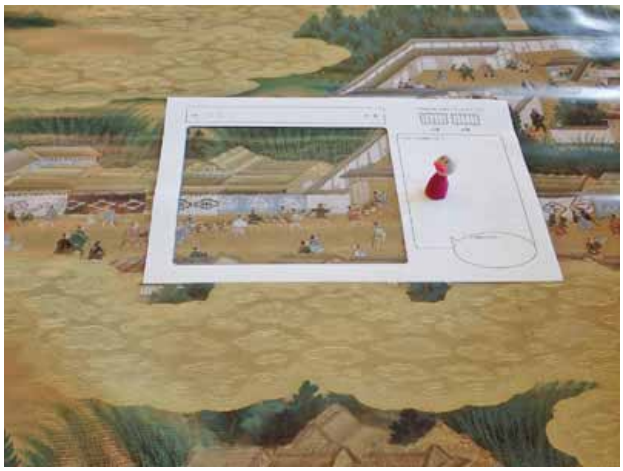
ワークショップ

講演に引き続き、佐藤氏による 70 分のワークショップ「屏風に物語をつくりだす鑑賞プログラム－江戸図屏風を題材に」の実演が行われた。

ワークショップを体験する参加者

まず、江戸図屏風の一部が印刷された B5 サイズ程度のカードを手に、床に敷かれた江戸図屏風の複製の中からその場所を探す活動を行った。

次に、江戸図屏風の中で自分が気になった場所に、一部が写真のフレームのように切り抜かれたワークシートを置き、さらに小麦粉粘土でできた小さな人形を置いた。子ども向けにこのプログラムを行う際、子どもには「この絵の中に自分がいる」ということを想像することが困難なため、自分の分身となるような人形を置くことによって発想を促すことができるとのことだった。今回は時間短縮のため、すでに人形が用意されていたが、実際は人形作りから始めるそうである。



江戸図屏風にフレームと自分の分身を置く

その後、屏風の上に置いたワークシートの位置が近い 5～6 人のグループに分かれ、江戸図屏風に関する研究者からの情報をもとに作成された解説を見ながら、そこに描かれているものについて話し合った。武士、商人、花見をする女性、犬など、様々なものが描かれていることを発見することができた。

このワークショップを行った際、研究者にも相談し、よく作品を見ることができるように、靴を脱げば屏風の上を歩いてもよいことにしたが、芸術作品の上に乗ることに対しては強い批判もあったとのことである。

実践

休憩をはさみ、60 分の「自館のプログラム、ワークシートの改善案の作成」を行った。ここでは、各自で検討した後、2～3 人でその結果を発表し合った。同時に他館のワークシートの工夫や学習プログラムの話を聞くことができ、有意義な時間となった。

（成河端子　一宮市博物館　学芸員）

互いに改善案を発表し合う

平成26年度愛知県博物館協会
保存・修復部門研修会
「文書資料の修復を学ぶ」

平成27年2月20日（金）、知立市歴史民俗資料館において、保存・修復部門研修会を開催した。本年度は「文書資料の修復を学ぶ」をテーマに、株式会社工房レストア・平田正和氏をお招きし、講演ののち、冊子の和綴じ修理および文書資料の修復体験の指導をいただいた。冊子の和綴じ修理には西尾市岩瀬文庫のボランティアの方々にもご協力いただいた。当日の参加者はボランティアや会場館スタッフを含め総勢65名に上り、賑やかで充実した会になった。研修会を通して、温湿度管理や雨漏り対策など、資料保護のために最低限必要なことを確実に実行する必要性が確認された。また資料に劣化が見られた場合、和綴じの修理を含め、応急処置・簡易補修として何ができるのかを知ることができた。

講演「文化財の修復について」

株式会社工房レストア代表取締役社長

平田　正和 氏

平田 正和 氏

（株式会社工房レストア代表取締役社長）

工房レストアは、大阪を拠点に紙文化財の修復を手掛けている。平田氏は修復活動をするなかで、地域資料を残していくことの難しさを感じ、修復するだけでなく、所有者や行政も含め、地域全体に資料の保護を広めていく必要性があると考えたという。この考えのもと、「紙文化資料の町医者」として活動するなかで見てきた多様な事例を合わせて、劣化した資料の保存対策についてお話しいただいた。

紙資料の劣化の要因としては、①虫などの生物、②ネズミなどの動物、③カビなどの菌類、④保管環境があり、これらの一つでも注意を怠ると資料を破壊することにつながるため、なるべく人的な要因を減らすことが重要だと示された。

劣化資料の修復が必要かどうかを検討し、必要と判断されれば、修復に取り掛かる。修復の原則としては、①オリジナル性を失わないよう原形を保存する、②修復材料の安全性を確保する、③可逆性（元に戻せる）のある修復材料を用いる、④修理前の状態を記録しておく、以上の４点を挙げられた。古文書の修復方法としては、①つくろい作業、②裏打ち、③漉（す）き填（ば）め（リーフキャスティング）があり、資料の形態や破損状況によって使い分けられるが、現在では③が主流であると紹介された。また冊子については、和綴じ修理は比較的容易にできることを示された。このほか、洋紙の保存についても、応急処置の方法や和紙による補修方法をお話しいただいた。

修理・修復体験①　和綴じ本作成

グループに分かれ、実際の和書を使用し、和綴じの基本である「四つ目綴じ」の方法を学んだ。まず細く切った石州紙で紙縒（こより）を作り、表紙を外した冊子を中綴じする。次に表紙を

和綴じ本作成体験の様子

戻し、製本針を使って絹糸を四つの穴に通して綴じていく。初心者には、この糸を通す順番が難しい。西尾市岩瀬文庫所蔵本で、糸の傷んだ和本の修理を奉仕しているボランティアの方々に手ほどきを受けながら、糸を一廻りさせ、最後に糸の始末をして完成である。体験中には随時、縒り方によって紙縒の強度が変わってくることや、四つ目綴じ以外の様々な綴じ方について、平田氏よりご教示いただいた。

修理・修復体験②　文書資料の修復

文書資料の修復体験の様子

実際の文書を用いて、虫損による穴を補修する方法を学んだ。文書の裏面から穴の周囲をやや大きめに鉛筆で型取りし、その型取りした紙と補修用の和紙を重ね、上から型に沿って目打ちでなぞる。補修用の和紙に目打ちで線がついたら、その部分に筆で水を含ませ、型の通りに和紙をちぎっていく。そしてちぎった和紙の周囲をひっぱり、毛羽を出し、毛羽に糊付けして虫損の穴に貼る。紙の質によっては、水を含ませてちぎるより、乾いた紙を手でちぎる方が毛羽が出やすく、補修しやすい場合もあるとのことである。以上の手順を繰り返し、時間一杯まで虫損を直した。尚、今回学んだ方法は数多く施される修復技法のあくまでも一例で、一番簡易なものであったが、想像以上に集中力を要する作業であり、修復の大変さを実感した参加者も多かったようである。

実際の文書を用いて虫損を補修

最後になりましたが、ご出向頂きました工房レストアの平田代表取締役社長、ご助力頂きました西尾市岩瀬文庫の皆さま、また、会場の提供を賜りました知立市歴史民俗資料館に謝辞を述べさせていただきます。

（安藤香織　徳川美術館　学芸員）

■ 一宮市博物館

【開館時間】
午前 9 時 30 分から午後 5 時
（入館は午後 4 時 30 分まで）

【休館日】
毎週月曜日（休日に当たる場合は翌日休館）
休日の翌日（土・日または休日の場合は開館）
年末年始（12/28～31、1/1～4）

【常設観覧料】
一般 200 円（160 円）
高校生・大学生 100 円（80 円）
小・中学生 50 円（40 円）
※（　）内は 20 人以上の団体料金。
※未就学児および市内小・中学生は無料。
　市外小・中学生は土曜日無料。
※一宮市内在住の満 65 歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料。
※身体障害者等の手帳を持参の方（付添人 1 人を含む）は無料。
※特別観覧料は、企画の内容によりその都度定めます。

【所在地】
〒491-0922　一宮市大和町妙興寺 2390
TEL. 0586-46-3215　FAX. 0586-46-3216
URL http://www.icm-jp.com/

【交通案内】
名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南口より徒歩 7 分
ニコニコふれあいバス「博物館西」下車徒歩 5 分

【駐車場】
博物館の西側・南側の 2 か所あり。計 61 台。

「愛知の博物館」　No.101
発行日　平成 27 年 3 月 31 日
編集・発行　愛知県博物館協会
〒489-0965
瀬戸市南山口町 234 番地
愛知県陶磁美術館内
TEL(0561)84-7474